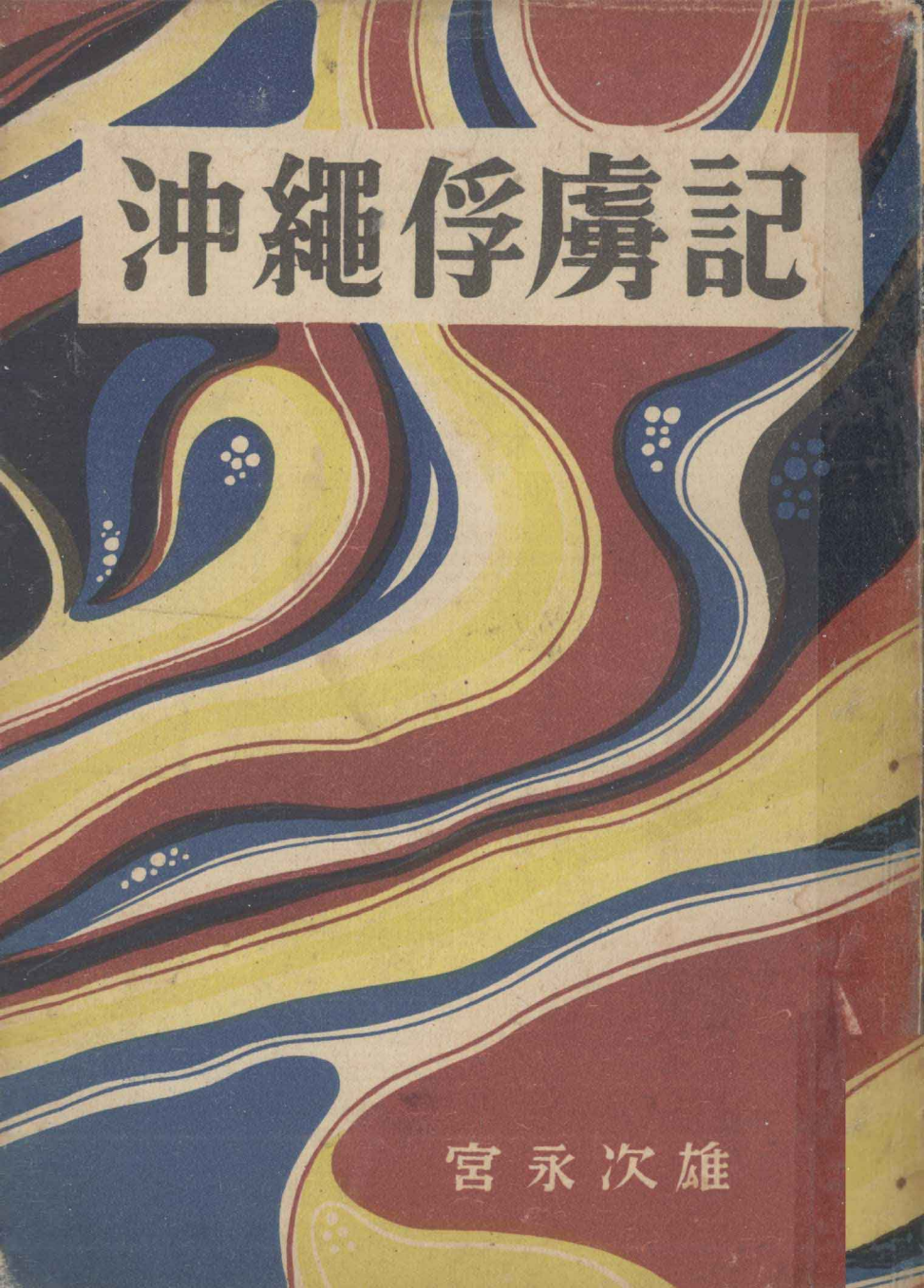


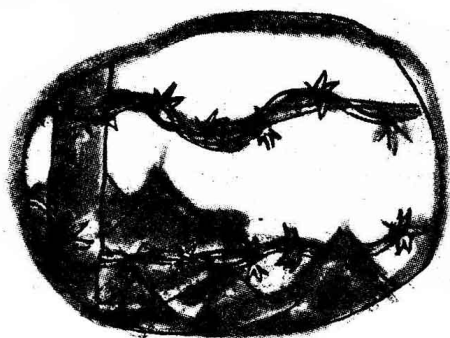


沖繩俘虜記

宮永次雄

沖繩俘虜記

宮 永 次 雄



雄 鷄 社

昭和二十四年十二月二十日 印刷
昭和二十四年十二月二十五日 發行

定價 一八〇圓

記唐俘獲沖



著者 宮 永 次 雄

東京都中央区日本橋江戸橋一ノ七(山叶ビル)

發行者 武 内 俊 三

東京都千代田區神田神保町三ノ二三

印刷者 鈴 木 竹 次 郎

東京都千代田區神田神保町三ノ二三

印刷所 旭印刷株式會社

東京都中央区日本橋江戸橋一ノ七(山叶ビル)

發行所 株式會社 雄 鷄 社

電話日本橋(24)四九〇二・二七九一

(落丁・亂丁の際は早速お取換へ致します)

第一篇 宮古島の記

目次

ア	ダン	バ		三	
慾	望			八	
の	び	る		二	
特	攻	隊	員		一七
煙	草			二二	
陣	地	構	築		二八
油					三四
結婚十周年					四〇

第二篇 鐵柵の生活

夢		四七
飛行場設營		五四
芋		六六
マラリア		七五
敵		八一
終戦を聞く		八六
星のある夜空		九二
船上		九九
陸上		一〇六
柵		一一〇
P		一二五

小野山の一夜	二〇
弾痕のある風景	二五
スミス軍曹	三三
「I・D」と「P・O」	三九
検査	四四
O・B・C	四八
満洲を憶う	五五
娯樂	六二
P・W社會	六九
小野山タイムス	七三
歌の集い	八四
沖繩娘	九〇
お喜代	九五
灰色の戦友	一〇四

姫百合の塔	二〇九
捕虜の話	二二六
P・W根性	二三三
ハーバ	二三八
知り合うこと	二四三
文化的なもの	二四八
性慾	二五三
孤兒	二五九
歸心	二六六
ライカム	二七三
シラミの歌	二七九

第一篇 宮古島の記

アダンバ

一年有半の島の生活で、生涯忘れることの出来ない植物が三つある。これをランクするとナンバー・ワンに位するのがアダンバ、次に芋、のびるという順序であろう。アダンバはたしかに、宮古島の象徴であつた。兵隊はこのアダンバの爲に苦しみ、泣き、又時として、このアダンバ故に救われ、愉しみを満喫した。

アダンバの持つ強靱な表情は、たくましく若々しい兵隊たちにとつては、まことにふさわしいものとして素描し得るのであるが、私の疲れきつた心にはあまりにとげ／＼しい存在であつた。

アダンバが植物學で何科に屬するのか、そうした知識に乏しい私には判定出来ないが、大きな蛇のようにぬる／＼と伸びた莖に、君子蘭の大きい葉が完全に武裝して、まつわりついたようなその姿は、サボテンのテン淡さにも似ず、薔薇のとげ／＼しさとも違う南國獨特の風貌が見とら

れる。

張り手で双葉山以下の立浪部屋を總なめにして、國技館の觀衆に、にくまれながら人氣を博した前田山を、往年の出羽ガ獄の體格にまでひき伸ばして見たら、或いはアダンバの感じをいくらか感じとつてもらえるかも知れない。

そのアダンバが宮古の山野をうすめているのである。山という山、麓から路へ、そして民家の裏庭にまで。兵隊はアダンバに觸れることなく行動した日は恐らく一日とてなかつた。

「敵は来る、必ずこの島に上陸する」とがむしやらに教えられて、兵隊は夜を眠ることさえ許されずに島全體に穴を掘りまくつた。山も、野も、海邊も、完全に穴だらけになし得た時に、宮古島の防禦戰は成功すると、私自身おろかにも信じ始めていたのであるが、その命をかけた穴掘り作業にアダンバの存在がどれ程兵隊を泣かしたことか。

あのアダンバの鋭利なとげが、兵隊のカサ／＼になつた皮膚を傷つけると、「おや俺のからだにも紅い血が流れている」と改めて自らの生命を自覺することがあつた。圓匙でそのとげをたたき切ると、今度は執拗にはつたアダンバの根が、一日に四つ掘ることを強制された肉攻壕の作業進

涉を、嚴然とこぼんだ。兵隊は涙も出なかつた。

そのアダンバには丁度、パインナップルに似た実になる。數も少なく、そしてなか／＼熟してくれないのであるが、眞夏の七月頃に、時として蟻がびつしりたかつた甘酸っぱいアダンバの実を見出すことがある。

飢餓に苦しみ、體力をすりへらした兵隊にとつて、それはまさしく天の恵みであつた。

この島に着くまでは、バナナの鈴なりになつた風景を頭に描いていた私たちであるが、現實の宮古島では、バナナやパイアは全く民家の南國風景を裝飾する單なる風物詩にしか過ぎなかつた。

だからこそ、アダンバの實は、兵隊たちには、忘れられない豪華なフルーツとしてその味覺を満足さしてくれた。だが残念なことに、日本軍隊の嚴正な軍規にしばらくして、兵隊は思うようにこの珍味を愉しめなかつた。形式一點ばりの日本軍隊は、兵隊は榮養失調に斃れても、兵隊が個人的にアダンバの實を求めることを嚴重に禁じつづけたからである。

將校は下士官に、下士官は古年兵に、古年兵は初年兵に對して、徒らな束縛を強いることがあ

たかも日本の軍規であるが如くに見えた。そして私は、その最下級の初年兵として一年半の宮古の生活を、まるで奴隷のように強いられて來たのである。個性の總てを抹殺され、徒らに無教養な下士官と古年兵から——確かに無教養な上官程、初年兵に對する態度は苛酷だったが——暴力をふるわれて、私は日に日に卑屈になり物を云わなくなり、反抗心を強めて行つた。

「こんなことで俺の性格を變えられてたまるか！」「ごまかせるだけごまかしてやるんだ！」と表に出せない齒ざしりをしつづけたものである。

「アヤをつける」——この言葉は、私が軍隊で覺えた言葉の一つである。

兵隊が、美事に熟したアダンバの實を探しあてて朗らかに豪奢なひと時を愉しんでいると、これを見た上官は必ず「貴様！ 誰の許可を得て食つとる！」と、まるで犯罪者に對する刑事の態度で覆いかぶさつて來る。「アヤをつける」のである。アダンバの實を食うことが、兵隊の體力恢復に、延いては日本軍の戦闘力向上に益することを百も承知しながら、どうしてもそれを認めないかたくなさを、上官の特權として誇つてゐるかに見えた。卑屈になつた兵隊は決して「班長殿如何ですか」と眞心からは云えなかつた。

いつも蔭にかくれて、欲しいものを一人で食い、聞きただされると大抵嘘を答えた。そしてその嘘はすぐばれるのであるが、ばれたからといって決して嘘をつくことを改めようとはしなかつた。

この嘘、最も悪質の形式主義に原因したこの嘘が、日本を敗戦に導いた大きな素因をなしていることに、私はその後氣づいた。

軍の最高主脳部は、嘘のかたまりを金科玉條とまもつて無謀にも「敵を知らざる」も甚だしい戦いを闘いつづけ、「自らの力」をさえも平氣で誤認して、祖國を滅亡へ滅亡へと導いたのである。

アダンバの實と敗戦——私は笑えない。

慾

望

私は満洲で、一七七部隊に召集の命を受けた瞬間から、先ず、浮世の慾望を棄てる覺悟をきめた。それは自棄に似た淋しいあきらめでもあつた。

「酒にも煙草にもお別れさ——」半ばは棄てばちな、半ばは冷たい未練を抱きながら、この言葉をぶちつけて、私は私服を脱ぎ棄てたのである。

酒はともかくとして——勿論どん底の兵隊稼業でなければ、これもなか／＼であるが——煙草を斷つということは、私にとつては二十九年に近い最愛の戀人との別離を意味するのであるから、一寸そこらのカフェーで知り合つた女と手を切るように淡々たる心境ではあり得なかつた。その戀人とも斷じて別れようという悲壯な決意が、私の軍隊入門の心がまえであつた。

正直なところその頃の私には「散つて九段の櫻花」なんてな一途なものではなかつた。と云つて

いいかげんにごまかして逃避してやれ、などという非國民的な心臓を持つていたわけでもない。

誰からとなく豫備知識をふき込まれている軍隊に少なからぬ憂鬱を感じながら、何とかその苦しい生活をやり抜けてやろう——他人のやつてることが俺に出来ぬ筈はない、といったところが、偽らざる私の日本人としての氣持だつた。

所が、その禁煙の悲壯な決心は、哈爾濱の兵營生活では、至極あつさり解消されて、私は一日に二十本入りの「極光」を一箇ずつ、しかも九錢と云う兵隊さま／＼の安價で、愉しむ幸福に恵まれた。

慾望——それは達せられてしまうと、至つてたわいもないものである。私は、くそ面白くない兵營生活をほのめかして、友人に書き送つたりする心の餘裕を持ちつづけながら、まあ一應大過なく初期の兵營生活を過していた。

それから數カ月後の宮古島の生活が、かくも厳しくかくもみじめなものであらうなどは、全く夢にも考えることなく——。

人間が、その環境によつて、如何に小さく萎縮するものであるか、私はその事例を、宮古の兵隊の欲望するものにはつきりと見た。始めは、煙草が足りないなどと贅澤を並べていた。それがいつの間にか、何とかして腹一ぱい食つてみたいと少しずつ切實なものに變つて来た。やがてその切實さは更に深刻なものにまで移行していかざるを得なくなつた。

「ああ、一寸でいいから鹽づけが欲しいなあ」

「一時間でいいから眠りたい」

「月に一度で澤山だから、からだを洗いたいもんだ」

「せめて手を洗う水が欲しい」

「汗とあかで、べちゃ／＼になつた禪を洗わしてもらえないか」

その頃になると、兵隊たちは、體中にシラミの襲撃をうけて、カサ／＼になつた白い皮膚に、そのあとただけを赤い斑點としてきざみつけていた。

マラリアで四十度の高熱を出すと、どうにも使いものにならず、それでも上官からは結構いやみを並べられながら、兵隊は蚊帳と毛布一枚だけの就寢を許可された。熱にうなされながら、「ああ俺はありがたくも公然と寝ることが出来る」とホツとしたことさえあつた。